

わがまち歴史散歩

近世池田の文人を考える視点

○きら星のごとき文人群

江戸時代池田の特徴は何かと問われたら、書画にせよ、俳諧にせよ、漢詩文にせよ、全国に名の通った文人が池田に住まい、大きな業績を上げたことを述べるのに躊躇はないでしょう。

ちよつと名を挙げてみましょう。まず、牡丹花肖柏。室町時代の人ながら、池田の連歌文化を支え、近世においては池田の町で文人として活動する人びとの精神的支柱となりました。大広寺に立つ「牡丹花隠君遺愛碑」は近世池田における漢詩文化の柱だった田中桐江の撰文です。近世池田の文運は中世室町期以来の長い伝統として、近世池田の文人の誇りとなっています。

平間長雅。京の白川に住み一般庶民への和歌普及に努め、観音信仰の念を深めました。医者で俳人・津田道意の招きで池田に来て以来、久安寺を拠点に多くの門人を育てました。田中桐江。出羽庄内の生まれ。江戸で秋生徂徠と親交を結び、柳沢吉保に侍講しましたが、事件を起し、池田に来ます。近在の好學



田中桐江画像（伊居太神社所蔵）

の士が朱子学と詩文の教えを乞い、やがて呉江社を結成、会員の詩文を掲載する『呉江水韻』を発行し続けるなど、池田のみならず、京・大坂・尼崎など周辺地域に「池田学派」の名を高めました。荒木蘭皐。大坂生まれ。池田の酒造家鍵屋、荒木適翁の養子となります。富永仲基は実兄。鶏肋集全8巻ほかがあります。松村月溪（呉春）。師の与謝蕪村は月溪が妻と父を亡くして悲しんでいるのを見て、俳人として名を上げていた川田田福の池田の書店に行かせました。このとき心機一転の意を込めて呉春と称し、絵師として四条派を起こします。山川星府。通称山川庄左衛門。田福・月溪を介して蕪村晩年の弟子となります。けまり・謡曲・書画・骨董・茶の湯・生花などに長しました。

廣瀬旭莊。豊後国日田に生まれ、主として大坂で活躍。詩作に優れ、全国の士と交わりました。『日間瑣事備忘』は日記。死の75日前に池田の門人から勧められ池田に来ましたが、ここが終焉の地となります。

以上、7人ほどの名を挙げました。もちろん、これが全てではありません。多くの文人・学者などが池田を舞台にそれぞれの文事を繰り広げています。『新修池田市史』第2巻には時期を区分しつつ詳しく解説がなされています。

○『池田人物誌』上下

大正12年（1923）池田の太陽日報社から発行の『池田人物誌』上下は、吉田鋭雄・稲束猛の共著です。2巻合わせて900ページ。吉田は朝日新聞社勤務だったのを、体調を崩して退社し、田中桐江の研究を進めました。稲束は池田出身で京都大学に進み日本史を学んだ若い学究の徒でした。同書は、よく原本にあたったもので、現在でも池田人文史研究の最高水準、古典と言ってもいい位置を占めています。問題は、この本の境地をどう超えていくかです。ここでは、池田

文人たちの活動した場と、周囲にいて支えた人々に注目することから考えてみることを提案してみたいと思います。

○近世池田文人の活動を支えた近郷農村

そもそも近世池田の文人については、もっぱら当の人物の優れたゆえんの調査に集中し、それを支えた地域との関係は、二の次、三の次に置かれてきたように見えます。一つ実例を指摘してみましょう。『池田人物誌』で田中桐江の弟子たちを見ていくと、渡辺掬雲・柳月親子の存在に気がつきます。代々川辺郡小戸庄に住んで醤油醸造を業とした豪商であると考えられます。うれしい記述です。

田中桐江は町場としての池田の人士に支えられていただけでなく、近郷農村（小戸庄は現川西市）にも弟子すなわち支援者の輪を広げていたことが見えてきます。池田の文事を支えていた存在として、近郷農村も浮きあがってくることは大事な視点になるのではないのでしょうか。

（市史編纂委員会委員長・小田康徳）

◆問い合わせは生涯学習推進課

☎754・6674